

世界のすべての子どもたちが 教育を受けられる世の中に

NGO「シエラ」
プロジェクトマネージャー
青木美由紀さん
創価大学
文学部英文学科卒業



Miyuki Aoki

あおき・みゆき／一九六九年宮城県生まれ、八五年アメリカ・カリフォルニア州に高校留学。八八年創価大学文学部英文学科に入学。九一年メキシコ・グアナフアト大学に交換留学。九三年創価大学卒業。九五年アメリカ・コロンビア大学テイラー・チャイルド心理学専攻修士課程卒業。九七年アメリカ・コロラド州デンバーに在住。二〇〇〇年NPO法人「シエラ」国際保健協力市民の会に入会。

青木美由紀さんは、南アフリカ共和国・リンポポ州で、HIV陽性者やエイズ発症者の支援と予防啓発事業にたずさわっている。南アフリカ共和国は、HIV陽性者が世界でもっとも多い国とされ、成人感染率は21.5%。実に、五人に一人がHIV陽性者だ。

「毎週、お葬式があります。親しくなった村の人が、次にたずねると亡くなっていたりします。ここに来て一年になりますが、これだけは慣れることができません」

しかし、長く悲しみにひたっている時間はない。現地のボランティアの人たちとともに村々をまわり、エイズ発症者の相談ののったり、遺された子どもたちの今後に心を配る。行政サイドとの交渉もある。

「具体的な仕事は、なるべく現地の人にやってもらう方針です。私は、組織づくりや支援事業のコーディネイト、人材育成などといった仕事為主ですね」

それでも、やらなければならぬことは山のようにある。



写真提供：JVC

青木さんがこう思った国際協力の仕事につこうと思ったきっかけは、創価大学三年のときに訪れたメキシコで、一人のストーリート・チャイルドと出会ったことだった。

「なぜ学校に行かないのってき

エイズで親を亡くした子どもたちと

青木さんは、その後、交換留学生として、メキシコのグアナフアト大学に留学。そして、創価大学卒業後は、アメリカのコロンビア大学ティーチャーズカレッジに進み、「国際教育開発」を学んだ。そのかたわら、ボランティアで、ニューヨーク

いたら、『学校じゃ、お金を稼げない』というんです。七歳の男の子に、そんなことを言わせてしまふ世の中って、なんなんだろうと思いました」

当時、青木さんが家庭教師をしていた子どもも七歳だった。なに不自由なく暮らす七歳がいる一方で、路上でチューインガムを売る七歳がいる。国と国の間にある貧富の差を目の当たりにした瞬間だった。

「世界中のすべての子どもたちが教育を受けられるようにするには、どうしたらいいか、私にできることは何かと考えるようになりまして」

「リンポポ州の村の人たちは、ミユキは私たちに希望を与えてくれるなんて言ってくれますが、希望を失わないのは、彼らです。子どもたちです。その力がどこから出てくるのか。元気をもらっているのは、私のほうですね」

プロジェクトは、一年を経て、まだ緒についたばかりだ。当分、日本には帰れそうにもない。

「大学の文系学部棟の前にプロンズ像があって、そこに、『英知を磨くは何のため 君よ それを忘るるな』『労苦と使命の中にのみ 人生の価値(たから)は生まれる』と開学の指針が掲げてあるんです。いつもいつも、この言葉をかみしめています。私の人生の指針です」

プロンズ像とは、創価大学の開学時に、創立者が記念にと学生たちに贈ったものだ。頭上にそれぞれ天使を配した印刷工と鍛冶屋の一对の像。そこに刻まれた指針は、卒業生たちの胸にもまた、深く刻まれている。

人類の平和に貢献する国際人の育成のため、力を入れているのが国際交流。現在、学術交流協定を結んでいる大学は、世界44カ国・地域の100大学にのぼり、47カ国・地域からの留学生も受け入れています。そして、学内では20カ国語の授業を展開し、学生サークルの各国語スピーチコンテストを行うなど、国内トップクラスの国際性を誇っています。

